

# 日本女子大学所蔵友山文庫旧蔵資料について

福 田 安 典

浅野三平先生は御定年後も精力的に研究を続けられ、その成果の一つに『増訂秋成全歌集とその研究』（おうふう、平成一九年）の御上梓がある。本書は昭和四四年刊『秋成全歌集とその研究』（桜楓社）の増訂版であることは浅野先生みずからがあとがきに記されている。四〇年を超える先生の考究心の成果である。

上田秋成については『雨月物語』『春雨物語』のみ言及されることが多く、和歌についての研究は遅れていた。そのために資料発掘と整理が先務であった。浅野先生が調査に赴かれた機関は一七カ所、個人は二二名に及ぶ。その中には現在不明のものがあり、『上田秋成全集』（中央公論社、一九九五年）に於いても浅野先生の翻刻に頼らざるを得ない作品がある。貴重なお仕事を後世に遺された。

浅野先生が紹介された秋成和歌資料の調査先で、個人として目を引くのは京都在住であった友山文庫主、中野莊次である。『増訂秋成全歌集とその研究』では、

『上田秋成全歌巻』

『海道狂歌合』

『源氏五十四帖』

『白芙蓉を人の見せしを枕に置きていへる』

『実法院あて書簡』

の五点の底本が友山文庫本である。特に『海道狂歌合』は浅野先生がニューヨーク・パブリック・ライブラリー所蔵の秋成自筆絵巻を発見され、従来は注目されていなかった友山文庫本も秋成の自筆であったことを明らかにされ、その資料的価値を見いだした印象深い作品である。浅野先生自らも『増訂秋成全歌集とその研究』に再掲されるほどの代表的論文と考えておられたようである。友山文庫所蔵の秋成資料については、長島弘明先生が、「中野莊次氏の友山文庫にも、また秋成の資料を数多く蔵する」として上記五点以外に『応雲林院医伯之需擬李太白春夜宴桃李園序』、『吉野行』、『利休の歌に和した和歌懐紙一軸』、『秋成手製の急須一つ』などを挙げられている。<sup>1)</sup>中野莊次は稀代のコレクターであって、友山文庫は研究者垂涎の蔵書で充ちていたのである。

この友山文庫の旧蔵書はその後に巷間で見かけるようになり、日本女子大学でも三作品購い求めることができた。いずれも他の存在を聞かない稀少本であり、本誌に紹介することで浅野先生の墓前に捧げたいと思う。

本論に入る前に中野莊次について整理しておく。京都大学、とい

うより京都帝大国文科卒、『風葉和歌集』研究のバイオニア的存在であり、『増訂校本風葉和歌集』（昭和八年、贅精社）は夙に有名である。友山文庫主としても野間光辰先生の『完本色道大鏡』（昭和三十六年）に関わり、短冊や色紙の収集家としても聞こえ、その成果に『名家伝記資料集成』全五巻（思文閣出版、昭和五十九年）、『和歌俳諧人名辞書』（臨川書店、昭和六一年）がある。その他にも『眺望集』、『奈良地誌』、『奈良縣金石文年表』、『芭蕉翁全傳』、奈良文化選書など多くの出版に関わった。また中野文彦の名で地名学にも貢献している。骨太の在野研究者であった。平成七年没九一歳。

## 1 中村訓栄「をさ、の記」七編

まず書誌を記す。写本、半紙本一冊。縦二三・八糎、横一六・七糎。薄縹色表紙。外題（中央、無粹、貼、原、書題簽、「九十九」の朱字）「をさ、の記 七編。内題なし。冒頭に「中村訓栄」、末尾に「文政九秋七月 中村訓栄」。虫損多。本文墨付き十九丁、八行。表紙裏に天狗と発句の刷り物が貼られている。本書、および中村訓栄については知ることがない。本書によってのみうかがい知ることができる。中村訓栄は和歌、俳諧、狂歌に通じた人物のようで花朝の俳号もあった。

文政九年七月十五日に訓栄は得藏院、森岡善七郎らと小篠に赴いた。小篠は吉野と熊野を結ぶ熊野街道の宿の名である。すなわち本書は文政年間における吉野、大峰や熊野詣の紀行文なのである。諸処に発句や和歌、狂歌を掲げ、熊野に関する西行の和歌、謡曲の記事も記されている。末尾に（引用には適宜句読点を付け、用字も一部通行体に改めている。以下同）、

予か編る熊野道中記、小篠の二路に委しく記す。書終る筆のついでに。

我うた 夢ならてことしもくまの高野山うつ、の筆に書ならしみむ

又 我句 稲妻や天下泰平五穀成就

とあるので、熊野や高野詣のたびにこのような紀行文を書いていたと思われる。現在は七編とある本書のみが女子大に残っているが、訓栄周辺にはそれなりの量の書冊が制作されていたであろう。

本書には休憩したり食事をしたりする場所を「本陣」として扇屋、橋本屋、坂本、半田屋……というように克明に記されており、所の名物も記されている。一例を挙げれば、

とろ川にてひるけ（本陣出水屋）

新蕎麦の味は最上嫁か茶屋

北南こ、のけしきはいつもめをよるこはず所也。此茶屋に「力餅」とて名物あり。

北南を上る血気のちからあしちからもちのきとくなるへし

圧巻は天狗の夢である。「我宿の人々と酒をくむにはなしくさぐさなり。百物語にあらねとも皆気味あしき咄也」と記す一夜があった。そして訓栄は夢に天狗を見たのである。

月はくまなくさへわたり、千種の花にをく露に月かけうつりて

かす／＼にひかりわかつは田楽のおもひしていと心ときめくに、  
向ふの岩のはさまにもありけに見ゆるにぞ。めをとめて見る  
に何そはからん。二丈計の天狗の鼻はかりいたして姿は草花に  
かくれて見えず。「すは。事こそ」とつゝには申さぬ念仏をと  
なへ、めをはなさず。暫しありて顔をぬとさし出し、「汝、訓栄。  
心は風雅にやさしけれと、ともすれば慢心きさす」。

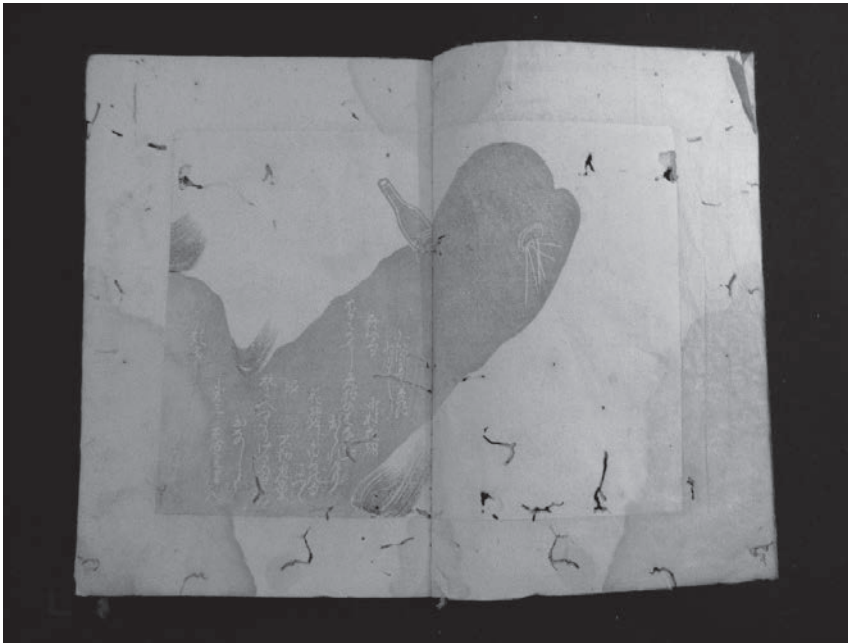
として風雅に耽る作者を天狗が叱つたのであつた。すつかり怯えた  
作者の取つた行動が以下である。

只うつうつと足もなへ身うちしひれて動かれねは「ゆるし給へ。  
／＼」と詫けり。天狗は猶も鼻をふり立、さかりの花をかけと  
はし怒るにぞ。ふと思ひ出して「誠や歌の徳には天地も動かし  
鬼神もかんせしむるとかや。爰なり」と心を納めて一句を咄。

女郎花天狗の鼻にをられけり

かくうたへは天狗すこし面を和らけ「誠に是真実の句なり。是  
にてすこし心やはらはけはこたひはゆるすなり」といふかとおも  
へは、一陣の風颯と吹来り、大木を吹折、若葉飛して乱をあら  
はし、いつくともなく飛去たり。

茶番のような安っぽい歌徳譚なのだが、訓栄にとっては感夢靈応  
であつたらしく、この夢を人に語つたところ、その句を発句として  
脇句を不動鬼童、第三を天狗院狸穴が付け、訓栄が見た天狗の絵を  
添え、さらには狸穴が榎の木に彫り込み、吉野で刷り物にしたとい  
う。その実物が見返しに添付してあるので掲げておく(図版1)。



図版1 天狗と訓栄 俳諧三つ物

## 2 『大和八条村孝子聞書』

本書（以下女子大本『聞書』）についてはすでに紹介済みである。<sup>(3)</sup>委しくは拙稿に拠っていたのだが、要点のみを挙げておく。一部前稿と重なることを始めに断っておく。

写本、大本一冊。縦二六・九糎×横一九・三糎。表紙は薄茶で無地。外題は元題簽が剥落して「大和八条村孝子聞書」と墨書。内題は「孝子聞書」。墨付き二三丁。「大和国十市郡八条村、百姓に孝子あり。名を山口庄右衛門といふ。其父与十郎へ仕へし深切を聞き侍るに、此廿六年以前、宝曆四甲戌年の秋」という冒頭が端的に示すように、宝曆から安永にかけて大和の八条村の山口庄右衛門の孝行を書き留めたものである。庄右衛門が父与十郎を得罪して伊豆の新島に流されたことを深く悲しみ、公に願ひ出て島に介抱にわたり、後に許されて故郷に帰った美談である。

この話は『官刻孝義録』には採られなかったものの、当時はかなり知られた話であって、まず直後の安永八年四月に「八条ものがたり」（佐々木善行者、式下郡八百新町書肆千葉清蔵刊）が刊行され、ついで三浦花顛『近世続畸人伝』（寛政五年）にも採られ、黒川真道も『日本教育文庫』（明治四三年、同文館）に採っている。

その『日本教育文庫』でこの話を知った森銚三は「新島ものがたり」という小品を著した。「停戦後二三年」というから一九五〇年前後であろうか。その小品を小出昌洋が見いだし昭和五八年三月に配り本として出版された<sup>(4)</sup>。その後、『傳記文學 初雁』（昭和一七年）を小出昌洋が講談社学術文庫（平成元年）にまとめるに際し、「新島ものがたり」も編入している。小出昌洋は「森鷗外の短編を読ん

だような気がした」と評している。

諸本については谷山正道「芝村騒動と『八条ものがたり』」に詳しい。<sup>(5)</sup>大和国十市郡関係の文書が天理図書館近世文書室によって整理され、平成七年に『天理図書館 近世文書目録』第三（大和国十市郡之部）が編輯された。その中に八条村平井家文書があり、孝子庄右衛門に関する次の六点が確認された。

①「大和国十市郡八条村孝子庄右衛門父子之記」（安永八年二月、堤定賢著）

②「大和国庄右衛門孝子聞書」（写安永九年九月下旬、「伊賀国孝子富松行状書」と合綴）

③「八条ものがたり」（安永八年四月、佐々木善行者、城下郡八百新町書肆千葉清蔵刊）

④「八条孝子行状聞書」（内題「八条ものがたり」、天明元年六月、佐々木善行者、大坂南久太郎町心齋橋筋書林河内屋喜兵衛刊）

⑤「孝子庄右衛門行状聞書」（文化三年正月、今崎弥次郎写）

⑥「孝信古今物語」（内題「孝子聞書」、「安町小松屋」写）

この六本に、⑦女子大本『聞書』、⑧黒川真道旧蔵本（『日本教育文庫』底本）⑨『近世大和紀行集』所収本（平成二十一年、クレス出版）を加えた合計九本が山口庄右衛門関係の基本資料である。

これら諸本の関係は、②⑤⑥⑧と女子大本『聞書』は同系統であり、書承関係も想定しうる。⑧がもっとも詳しい記述を持っており、女子大本がもっとも簡略である。単純に書写によって記述が増補されたと考えれば、

女子大本『聞書』↓②⑤⑥ ↓⑧（増補）

の三段階成立を仮定することが可能である。この仮定のうえに立て

ば女子大本『聞書』が古型ということになるが、そのように断定するにはさらに多くの諸本の登場を待つしかないであろう。本稿では、近世期に流布した孝行譚で、三浦花頭、黒川真道、森銃三の心を捉えた山口庄右衛門の基本資料の中でも貴重な『聞書』が友山文庫の所蔵を経て女子大所蔵に帰したことを報告しておく。

### 3 『大和国吉野郡清九郎行状記』

近世後期の天保一三年に浄土真宗信者の行状を集成した『妙好人伝』が刊行された。以降、妙好人というフレーズが流行するのだが、その代表と目されるのが大和清九郎である。しかしながら、内村和至が指摘するように、<sup>6)</sup>『妙好人伝』以前は孝士伝・教訓物・読本的に受容されていたのであって、多くの大和清九郎伝が生成されていた。

大和清九郎は和州高取郡銚立村と丹生谷村で篤実な真宗門徒として生き寛延三年に没した。貧困かつ無学でありながら、真摯な宗教心、尋常ではない親孝行ゆえに時代に注目されて多くの伝記資料が生まれたのである。寛延三年に没したが、明和四年版『浄土真宗孝信清九郎物語』の明和元年序文には、

清九郎の行業聞つたへ写し来る事世に多し。此人若き頃より親に孝行、又真宗の流れを汲み信厚ふして安心す。其物語を我ふる里の子弟同行、本願他力真実信の種にもと梓にちりばめ送り侍るのみ。

とあり、死後直後より巷間に多くの写本が出回っていたことを知る。本資料はその一つであるが、諸本の位置づけの上で注目に値する一本である。

書誌を簡単に記す。写本、半紙本一冊。縦二三・五糎×横一六・七糎。薄茶表紙。外題は題簽が剥がれ「大和の清九郎」と直書。内題なし。墨付き三五丁。末尾に「奥州南部八戸 丸屋吉郎兵衛」。

江戸期の大和清九郎伝は、『大和国吉野郡清九郎行状記』、『浄土真宗孝信清九郎物語』、『崑崙実録』、『和州清九郎伝』の四系統に大別でき、その代表本文が『大系真宗史料』に丁寧な解説を付して翻刻されている<sup>7)</sup>。女子大本には作品名を示す記述はないが、『大和国吉野郡清九郎行状記』の異本と思われるのでその名で論じる（以下、女子大本『行状記』）。

『大系真宗史料』所載の四系統を改めて並べてみる。

A 『大和国吉野郡清九郎行状記』（写本、恵後編、宝暦二年成、天明四年写）

B 『崑崙実録』（版本、覚順編、宝暦一三年成、明和元年刊）

C 『浄土真宗孝信清九郎物語』（版本、帰西編、宝暦六年成、明和四年刊）

D 『和州清九郎伝』（版本、法安編、享和元年刊行）

Aは清九郎没後二年目の宝暦二年に成立した。Cは六年後、Bは一三年後であるが刊年ではBが先行する。宝暦一四年が明和元年なので、AからCは清九郎没後一七年目の早い時期に成立、刊行されたことになる。

女子大本『行状記』はAの異本である。Aは名畑崇氏<sup>8)</sup>所蔵本であるので以下「大系本」と呼び、『大系真宗史料』の翻刻を利用し、女子大本との校異をみていくこととする。両者は概ね内容を同じくするが、まったくの異文を有する章段もある。一例を示す。

【大系本】伊賀の同行清九郎に対面の事

伊賀の国西城村三左衛門と云人、同行対面したきよし願ひにて、只一人かりそめに出ければ、われもくくと聞付て程なく廿八人に成て、大和国吉野のおくへと行程に、鉾堅村へ今三四里とおもふ程に、老人一人杖突て歩み来りければ、伊賀の同行、鉾堅村への道を問ふに、道をおしへて、何れもは伊賀の同行衆にてはなきかと問ければ、答て、左様也。かく問ひ玉ふは何国の人ぞ。我は鉾堅村也。名はいかにとふに、清九郎と答へければ、かの三左衛門、はつと言ふて忽いき絶たり。皆々おどろき、水などそ、ぎつれども正気つかず、清九郎家迄抱か、へて、其夜やうく正気に成けり。恥べし。如来様に聖人様に直々御目に懸りても氣を失ふ程の心なし。能くしぶとき物故に、聞事もおもふ事、悦ぶ事も深からず。されば此人か、る深き心人なれば、仏法あく迄聴聞し、両親法にうとかりしが、夫婦諸とも恥入て、ふたいの御座にうつり替りし悦びは、伊賀一国の教化となりし。此人油を渡世と仕けるが、清九郎が薪を御本山へ上る事をかんにして、われも何卒とおもひ立、胡麻の油一荷宛みづから荷なふて差上る事、月并なり。

【女子大本】伊賀乃同行清九郎に対面の事

大和の国清九郎同行に対面したき願にて、伊賀の国の同行三三人言合せ、吉野の奥と志、吾もくくと伴ひて程なく廿八人に成て、大和国と行程に鉾堅村に今三四里と思ふ所に、老人一人杖つきて歩行にて来り、人々をつくくとして見てもは伊賀の同行衆にては無かと問へは、皆々答て、左様也。斯問ひ玉ふは何国の人そと。

吾は鉾堅村の清九郎と答へければ、廿八人の内廿三歳計なる若者はつと言て忽息絶へたり。皆々驚き、水などそ、ぎけれども正気つかず。清九郎の家迄抱か、へて、其夜漸々正気になり。此若者西城村三左衛門とて殊勝して難有人也。はつへし。聖人善知識様に御目にかゝりても氣を失ふ程の心なし。かゝる例を不聞。感心し給ふへし。此人御本山に月々胡麻の油一荷自ら荷ふて御明しの油を差上る事、月並也。扱此廿八人二三日逗留して、皆々仏恩を疎成を悔み、今の悦ひ国郡に流行して真宗の繁昌此時にあり。

女子大本の方が本文が短く、堅の字を堅とするのは校訂者の誤読と思われるが、三左衛門の年齢が記されていたり、伊賀の同行と清九郎との邂逅も違いがあり、書承段階での異同とは思われない違いがある。明らかに異文である。この異同を考えるに、本作品の成立とも関わる問題があると思われる。本作品には序文と思しき冒頭文がある（大きな異同には傍線を付した）。

【大系本】

慈光はるかにかふむりて、光りの至り給ふ所には、みのりの悦びを得て、永き世の樂を。今爰に大和伊賀の両国真宗一河の流れ、老若歌舞音曲のすげる道をかたわらになし、本願他力に心をよせ、世わたる業にならべて悦びうやまふ事、日にまし、月にまして、さかりさかんなり。そのもといかんと尋れば、大和国吉野郡鉾堅村といふ所、行かふ人もまれなりし山人あり。

【女子大本】

慈光はるかにかふむりて、光の至り給ふ所には、御法の悦を得て、永き世の樂を。今爰に大和伊賀両国の真宗一河の流れ、老若歌

舞音曲のすける道を傍にして、本願他力に心を寄せ、世渡り業にならんと悦び敬ふ事、日に増、月に増て、さかりさかかなり。そのもとといかんと尋れば、大和国吉野郡鉾堅村と言 ゆきかふ人も希なる山奥に清九郎と言貧かりし山人あり。

大系本の「まれなりし山人」では意味が通じない。女子大本を以て始めて文意が理解できる。本書は大和と伊賀の真宗繁昌の源を清九郎に求める主旨で編まれたのであった。とすれば先の異同も「今の悦ひ国郡に流行して真宗の繁昌此時にあり」という文辞を有する女子大本の方が主旨に合致しているのではないだろうか。

ここで改めて大系本の成立過程を問題としたい。大系本には、

宝暦二年申十一月上旬

相州足柄下ノ郡国府津 御勸堂 恵俊聞書

とある。これは序文に「大和伊賀のいさみ立しは、此五七年さながら水の出ばなのごとし。予が国へ越しは宝暦二年申ノ冬成し」とあるので、平田徳は親鸞の関東の草庵であった御勸堂の僧恵俊が宝暦二年に大和と伊賀で清九郎の取材をしたと説いている<sup>8)</sup>。しかし大系本には「右ノ写本伊賀ニテ借用イタシ候セツ」として「天明二壬寅年迄、清九良往生ヨリ三十三年ニ及」という跋文らしき記述の後に次の識語がある。

此書ハ天明四甲辰閏正月十六日伊賀国西条村三左衛門宅ニテ借用イタシ帰宅ノ後書写

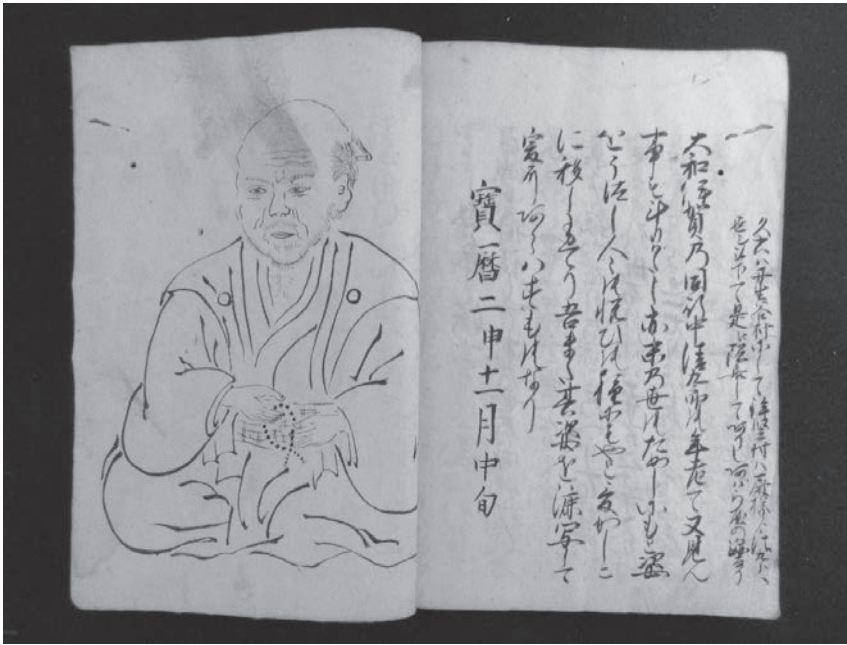
すなわち本書は天明二年に書写不明者が書写、その転写本をこれまた不明の人物が天明四年に転写していることが判明する。しかも天明四年転写者は伊賀の三左衛門から借りだしている。この三左衛門こそ先掲の清九郎との邂逅で気絶し、後に伊賀の教化となった人物であった。天明四年書写者はわざわざ三左衛門宅にまで訪問することが出来て、貴重な清九郎伝の写本を借り出すことが許されたのだが、その本文は天明二年転写本であったことになる。つまり粗悪な本であった可能性が高く、序文に見られたような意味不明の文辞は転写を重ねていく内に生じたものと推測ではないだろうか。

翻って女子大本の成立を見てみる。女子大本には聞書者たる御勸堂の恵俊の名がどこにもない。ところが大系本には見えない独自の本文がある(図版2)。

大和伊賀の同行中、清九郎の年老て又見ん事を計りかたし。亦末の世のためしにもと姿をうつし人々の悦ひの種にもと爰かしこに移しもてり。吾また其姿を漉写して爰にあらはすものなり

宝暦二申十一月中旬

すなわち女子大本調製者は恵俊が聞書を成稿したわずか一週間後に女子大本『行状記』を完成させたのである。その際には恵俊聞書は重要な取材源であったと思われる。その調製者は恵俊聞書をもとに一部異聞を取り入れながら女子大本を完成させたとの仮説がまず成り立つはずである。この仮説が射ているならば、宝暦二年十一月上旬成の恵俊聞書の原本が見つかるまでは、女子大本が『大和



国吉野郡清九郎行状記』の重要な諸本の一つとなるはずである。

女子大本の調製者は不明だが、旧所蔵者「奥州南部八戸 丸屋吉郎兵衛」という書き込みの文字が本文と似ている。同筆とすればこの八戸の丸屋吉郎兵衛が調製者その人となろう。また、大谷大学図書館林山文庫蔵『大和国吉野郡清九郎行状記』（宝暦八年成、近代写本）により宝暦期における信州から北陸にわたる転写と伝播が知られているが、女子大本の出現により、それより早い時期に奥州南部八戸まで清九郎伝が伝播している可能性も考えられるようになった。いづれにせよ女子大本『行状記』は大和清九郎伝伝播の重要な位置を占めている写本である。

以上、日本女子大学所蔵の旧友山文庫本を紹介した。稀書珍籍で聞こえた友山文庫旧蔵だけあって三作品ともに他には見えない貴重書である。友山文庫および中野莊次は浅野三平先生の学問形成に寄与している。浅野先生の警咳に触れた卒業生は講義で友山文庫のことを聞かれたことであろうと思う。その体験も「貴重」なるものであるので大切な想い出とされたい。

- 注(1) 長島弘明「秋成資料雑俎(二)―服部天神文庫・友山文庫資料他―」『實踐國文學』24号、一九八三年一〇月
- (2) 「都藝泥布」四号(二〇二二年一月、<http://chimei.koiky.com/tushin4.htm> 参照2023年6月26日)
- (3) 福田「日本女子大学本『大和八条村孝子聞書』について」(『上方文藝研究』第二二号、二〇一五年六月)



- (4) 森銑三『傳記文學 初雁』（講談社学術文庫、一九八九年）
- (5) 『ビブリア』百十二号（一九九九年十月）
- (6) 内村和至「メディアの中の人間像―大和清九郎伝の成立―」（『文芸と言語メディア その過去と未来』所収、明治大学文学部文学科文芸学専攻／文芸メディア専攻、蒼丘書林、二〇〇五年）
- (7) 真宗史料刊行会編『大系真宗史料 伝記編9』（法藏館、二〇一二年）
- (8) (7)と同じ。
- (9) (7)と同じ。